

---

# 呪われたもの

ありま氷炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪われたもの

### 【Nコード】

N7596X

### 【作者名】

ありま氷炎

### 【あらすじ】

女性呪術師の藍は2年ぶりに師匠で呪術司の典を助けるため、宮に戻る。典と帝は救ったものの自分自身に呪いがかかり、絶世の美女になってしまう。美女から元の姿に戻るため、藍は強と共に東の緑森国へ向かう。帝を狙う陰謀にも巻き込まれ藍は元の姿に戻ることはできるのか？

今年完結は無理そうです。7章は1月更新予定。





弟子のつれない答えに典はため息をもらす。

「君くらいの能力じゃないから、役にたたない」

役にたたないって。

あいかわらず容赦ない言葉だと思いながら、藍は美しい師の顔を見つめ返す。

「……典様。それを言ったら明様が怒りますよ」

すると典は苦笑する。

「正直なことをいったまでだ。私はただ美しいだけものよりも、能力のある者が側にいたほうがいい」

すみませんね。美しくなくて。

でも、美しいだけって、明様が聞いたら泣きますよ。

「藍。お願いだ。行かないでくれ」

まったく、愛の告白みたいだ。

でもその手には乗りません。

藍には典が必要としているのが、自分の呪術師としての力だけだということ、充分にわかっていた。

典が誰かを好きになったり、いれこんだりするところなどを見たことがなかった。

最初はその言葉に期待して、宮を出ていくのをやめたこともあったが、五回目となる今日はもう騙されるつもりはなかった。

「典様。がんばってください。私がいなくなればみんなちゃんと仕





やっぱり典様に何かあったんだ。

「今は言えない。とりあえず一緒にきてくれ」

その言葉に藍は仕方なくうなずき、彼とともに宮に向かうことになった。







実際のところ大丈夫ではなかった。辛うじて帝に呪いが届く前に止めることができたが、呪いが意外に強力で弾き飛ばすことができなかった。

呪術部から何名かの呪術者が来たが、典の助けになることはなかった。

そこで浮かんだのが、二年前に宮を出て行った藍だった。

可愛らしい女性でその姿に似合わず、甘えのないその気は典を唸らせることもよくあった。

宮を出るといつのを何度もひきとめたが、とうとう2年前に出て行ってしまった。

この2年大きな呪いが宮を襲うことはなく、典は弟子の藍の助けを必要としなかった。

しかし、今回はどうしても藍の助けが必要そうだった。

親友の強に頼み、藍を連れて来るように言って三刻が立とうとしていた。

体がきしみ始め、呪いを弾く結界が崩れ始めようとしていた。

まずいな…

帝に不安を与えないように笑顔を作りながら、内心、典は焦っていた。

「典様！」

ひさびさに聞いた元気な弟子の声に典はほっとする。

「何者だ！」



「いきますー！」

気をためたところでその声をかけ、その黒い気に自分の気をぶつける。

衝撃音がし、光が弾ける。

典は黒い気から解放され、ほっとその場に座り込む。しかし、煙から現れた藍の姿をみて、目を見開いた。

「……藍。残念ながら君に呪いがかかったようだ」

典の言葉と視線に、藍は自分の姿を確認する。そして、自分が別の姿、別の女性になっていることに気づいた。

「え？元に戻る方法？どうして？」

美しき呪術司はにこにこっと笑って、そう聞いた。

呪いを弾き、帝の安全がわかってから、典は再度結界を張り直した。そして藍を連れ呪術部の呪術司部屋に戻ってきていた。

「どうしてって、こんな姿で村に帰れないですよ。戻す方法教えてください！」

「……いや。ご両親も喜ぶと思うよ。今なら国で一番の美女だと思うけど」

「……！」

藍は師をギロリと睨みつける。

典の言葉通り、変化した姿は、それはそれは美しい女性体だった。青い瞳に波打つ金色の髪の毛、そして美しい肢体……

宮内を歩いて、呪術部に戻る途中、振り返らない者はいなかった。そう確かに、国一番の美女かもしれない。今なら…

でも、私はそんなものに興味はない。  
鼻が低くても、目が小さくても、胸がなくても、前の姿の方がよかった。

「戻る方法教えてください！教えないと典様、私が全身全霊をかけて呪いますよ！」  
美しくなってしまった弟子の言葉に典の顔が引きつる。

通常他人に自分の名前の書体を教えてはいけない。  
呪いに使われる可能性があるからだ。  
しかし、典の名前の書体はあることがきっかけで藍にばれていた。

「…しょうがないな。いいよ。教えてあげよう。多分この呪いは東の呪術師・賢ケンの仕業だ。あいつがしそうなことだ。多分私が防ぐと  
思っ、かけてきたのだろう」

「北の呪術師賢…。その人に会えば、呪いを解いてもらえるんです  
ね！」

「多分ね」  
「多分ってなんですか！」

「彼は気まぐれだからね。もしかしたら代償を取られるかもしれない  
い」

「代償？」

「一晩お付き合いするとか…」

「！嫌です！典様、一緒に行って頼んでください。お願いします！」

「だめだ。私は宮を出れない。あー強を連れていくといい。あいつ  
ならなんとか賢に頼めるかもしれない」

「強様？」

「そう」







「結構遠そうですね。飛んでいきますか」

「…歩いて半刻もかからない。歩いていこう」

飛ぶという単語にぎょっとした強に藍は同情を覚え、北の呪術師賢の家には歩いて向かうことにした。

「強様、賢様とはどういうお知り合いのですか」

『あいつならなんとか賢に頼めるかもしれない』と典が言っていたので、藍は2人がどういう関係か気になっていた。

「お知り合い…、賢は俺の兄だ。母親が違うがな」

「あ、兄?!」

意外な答えに藍の声が上ずる。

でも兄なら、確実に元に戻してくれそうだ。

藍は早くも元に戻る可能性が高いことに気付き、嬉しくなって微笑む。

「強様、先を急ぎましょう」

「そうだな」

嬉しそうな藍に強は少しだけ複雑な顔になったが、軽い足取りで前を歩く藍の後を追った。





「藍殿。殺すのはやめてくれ。ふざけた男だが俺の兄であることはわかりがない。兄さん！藍殿に殺されなくなったら、素直に呪いを解くんだ」

「…わかったよ」

二人に見つめられ、賢は肩をすくめると頷いた。

「飛ぶのか？」

「もちろん」

「強、もしかして怖いとか？」

「そんなことない！」

「じゃ、行きましょう！」

「行こう！」

呪術師の二人は強の両脇に並び、その腕を掴むと上空に飛び上がる。

強は顔を引きつらせながらも、悲鳴を上げないように口を必死に閉じてその時間を耐えていた。

元に戻るためには典（トク）の協力が必要と、藍達は宮に戻ることになった。

「お久々。典」

宮の呪術部に到着し、典を見つけると賢がへらへらと笑いながら手をふる。美しい呪術師はあからさまに嫌そうな顔をした。

「どうしたの？打ち首にでもなりにきたのかい？」

「打ち首？なんで？」

「呪いをかけたのは君だろ？親切に私は何もまだ報告してないが、



藍が苛立って声を上げる。

「はいはい。わかったよ。じゃ、典よろしく」

「ああ。藍、目を閉じて。少し痛いかもしれないけど。その時は「めん」

「痛いって！」

「しっつ、静かに」

師にそう言われ、藍は仕方なしに大人しく目を閉じた。

呪術司の呪いなど、受けたらどうなるか実際に怖かった。痛いつてどれくらいなんだろう？

「行くよ」

典は深呼吸すると両手を重ね合わせる。そして呪文を唱え始めた。賢と強は黙ってその様子を見ている。

「藍！」

そう声がして、典の両手から光が放たれる。

「！」

目を閉じてるがその光を感じ、藍は両手を握りしめる。痛みは感じなかった。ただ不思議な映像が頭の中に流れる。それは少し少年のような幼さが残る帝の姿であり、美しい銀髪の女性がその側にいた。

帝の正妻ではないよね？

帝の正妻は帝と同じ色彩の黒髪、黒い瞳の女性だった。

じゃあ、あれは？

光が消え、藍を包んでいた煙が窓の外から逃げていく。



「ああ、だからかあ」

「誰かって、誰なんですか！」

自分だけの責任ではなかったと呑気な声を上げる東の呪術師を睨みつけ、藍は師を見つめる。

「その姿、心当たりがある。まずはこのことを帝に報告する必要がある。藍、一緒に来てくれるかい？」

「報告！打ち首は嫌だ！」

「賢、心配しなくても大丈夫。帝もそう乱暴な方ではない。ただ一つお願いすることがあるけど」

「何？」

「私の代わりに呪術司として宮に残ってもらう。私は帝を狙ったものを捕まえる必要があるから」

険しい顔をしてそういう典に誰も何も言えなかった。

藍も元に戻るどころか、別の姿になったことに怒り心頭であったが普段と様子の異なる師の様子に黙っていることしかできなかった。



聞いたことがない名前に藍が首を傾げる。

ああ、でも私知ってるわけないか

藍はそう一人で納得し、帝と典に目を向ける。二人の間にはどことなく緊張感が流れていて、麗という女性が二人にとって大事に女性であることがわかった。

「麗は死亡したはずだ。あの時に」

「はい、私も生きていたとは思えません。したがって、今回は麗本人ではなく、その関係者だと思えます」

死亡…。

すでに亡くなっているんだ。

なんだか故人の姿に変化しているって変な気持ちだ。

「帝、私はこれから藍を連れ、麗の村に向かいます。帝の警備は今回の呪いの責任を取ってもらい、東の呪術師賢に頼むつもりです」

「責任。まあ、賢であれば咎めないつもりであつたが、典の代わりに警備をしてくれるのであれば有難い。賢であればお前の代わりに務まるう」

「はい」

咎めないって…

帝もいいのかな、そんなんで。

まあ、あの人じゃ、絶対に国家転覆とか考えてないって言えるけど…

藍は東の呪術師の軽そうな笑顔を浮かべると、思わずため息をつく。

「藍？」









「そんな…母さんが…」

草を身ごもった母親を帝が容赦なく切り捨てた。そう作り話をする草は唇を血が出るまで噛みしめた。

その大きな緑色の瞳は怒りで真っ赤に染まっていた。

「凜様、あなたは南の呪術師なんですよ？俺に呪術を教えてください。俺は絶対に帝を許さない」  
少年はいとも簡単に空の策略に嵌った。

凜は草を弟子に迎え入れると呪術を教えた。筋がよくその腕はめきめきあがった。

そして今朝、自分の力を試したいという草の願いをうけ、帝に呪いを放った。

美しき呪術司の噂は聞いており、結界に弾かれることを予想していた。  
しかし呪いは結界を破った。

しかしながら、一人の女性呪術師によりその呪いは破壊された。破壊される直前、女性の姿が変わるのが見えた。

呪いは草だけのものではなかった。  
誰かの呪いを融合したようだった。

「凜様。行きましょう」  
確実に帝を殺害するため、凜達は宮京に移動することを決めた。奇跡は二度と起きない。

宮を出た帝を狙うつもりだった。

「空様は元気かな」

「ああ、元気だろう」

草の無邪気な言葉を聞き、凜は胸が痛むのがわかった。空は優しく歌いながら人をだます。草は凜同様、空を慕っていた。

「飛んでいきますか？」

「そうしよう」

空が橙色に染まっていた。あと半刻もすればすっかり空は闇に変わるだろう。

二人は空に舞い上がると、宮京に向かって飛んだ。

「大丈夫ですか？」

西の碧雲国へきつんこくまで藍達ランは一気に飛んだ。呪術師である藍とその師、典テンはけるっとして碧雲国の大地に降り立ったが、強キョウは明らかに青ざめた顔で、その足元はふらついている。

「大丈夫だ」

そう答える声もどうしても無理をしているようにしか聞こえない。

無理しないでもいいのに。

藍はふらつく足元を頑張って大地に根付かせ、すくっと立つ強に目を向ける。

いつもであればその親友が無敵の警備隊長殿に「本当は苦手なのに、強がらなくもいいのに」などと痛恨の口撃を加えるのだが、師はめずらしく渋い顔をして、森の中を見ていた。

「……………何年ぶりなんだ？」

何年ぶり？

顔色が元に戻り始めた強が親友にそう尋ねる。

「……………十五年かな」

典は目を細め、森の中を見つめる。

「帰ってないのか？」

「帰れないだろう」



「麗？」

日が暮れたばかりの村に藍達が到着し、村人は銀髪に緑色の瞳の藍を見ると騒ぎ始めた。

しかし、その横に典の姿を確認すると、今度は非難や敵意の視線に変わる。

「典、どういっつもりだ？久々に帰って来たと思ったたら趣味の悪いはずらか」

背が高く、筋肉隆々の男が井戸から水を汲む作業を中断して、出てきた。

「田<sup>デ</sup>、久しぶり。麗のことで聞きたいことがある。この子は呪いで麗の姿に変わってしまったんだ」

「ふん。お前に話すことなど何も無い。裏切り者が！」  
「そうはいかない。知ってることを話してもらおう。帝の命がかかっているんだ」

強が田の鋭い視線から典を守るようにその前に立ちふさがる。手はいつでも刀が抜けるよう腰の鞘に当てられている。

物騒だな。強様。

でもそれくらいしないと、答えてくれなさそうだ。

でもなんだろう。

典様が裏切り者だなんて。

天下の呪術司に吐く言葉じゃないけど。

しかも私を見る視線が微妙だ。

友好的ではない。かといって敵意ってわけでもない。



「強様。強様は事情を知ってるんですか？」

「俺も詳しくは知らない。話したがらないからな。とりあえず、あの翠って女性について行こう。なにか手掛かりがあるかもしれない」  
「そうですね」

藍は強と共に典の後を追う。

田はため息をついたが、井戸の方へ中断した作業を続けるために戻っていく。村人も藍達に視線を送るのを止め、それぞれの家に戻っていくのが見えた。

なんだか、わからないけど。

色々秘密がありそう。

気になるのはやけに大人しい典様だけ。

翠さんとどういふ関係なのかな。

この今の私の姿に似てるってことは麗さんの姉妹かなにか？

え、じゃあ、容疑者だ！

藍がそう結論を出したところで、目の前に茅葺き屋根の家が見えて来る。窓からぼんやりと光が溢れていた。

「さあ、どうぞ。入って」

翠は扉を開けると、藍達を招き入れた。







く。

呪いで十五年前に亡くなった女性、麗の姿に変化した。だから絶対にその関係者のはずだった。それを探るため十五年前の真相を知る必要がある。

「わかった…話そう」

典は唇を噛むと、強を見据える。

翠に家を追い出され、一行は村から出て森の中に出てきていた。森はすっかり闇に包まれ、お互いの顔が見えないくらいだった。典が光の球を作り、手の平から放つ。それは藍達三人の間をふわりと上がっていき、上空で止まった。柔らかな光が3人を包む。

典はその光の中で、十五年前のことを語り始めた。

今帝の海は皇子であった十五年前、典と数人の供を連れ、お忍びで典　麗の村を訪れた　ゆつくりできるところがないかと海に相談され、典は自分の村を勧めたのだ。海と森に囲まれた村はとても豊かで、静養するにはいい場所だった。

典が村から宮の呪術部に入り、五年が経過し、呪術司の補佐の役目をするようになっていた。帝の後継者である海の身边警護を任せられ、よき相談役として典は海に仕えていた。

両親が早くに亡くなった典は従姉妹と共に育った。同じ年の麗は家庭的な女性であり、その妹の翠は麗と似た可愛らしい顔立ちだったが、性格は男勝りで麗とは対照的だった。

典は久々に村に帰ることを楽しみにしていた。また従姉妹たちが時期帝の海を一目でも拝める機会を喜ぶに違いないと思っていた。まさか、海と麗が恋仲になるなんて予想もしていなかった。

そしてその恋が麗を破滅させることになるなど、想像もできなかった。

数日後、典は海を村に連れてきたことを後悔することになった。

二人は磁石が引き合うように恋に落ちた。そして若い二人は誰も予想もできない行動をとった。帝になる海は黒族以外のものと婚姻を結ぶことができない。愛妾として麗を側に置くことができて、それは二人にとってつらいことだった。

若さのあまり、二人はすべてのしがらみから逃げた。宮の呪術師として、麗の行動は咎めるべきものであった。時期帝を誑かせた罪と、典とそのほかの兵士は二人を追った。





やっぱり伊達に呪術司じゃない。  
すごいな。

「大丈夫か？」

強が呆然としている男に声をかける。普通の人が見ると信じられない光景だろうなと強は男の心中を思いやる。

「あ、大丈夫です。ありがとうございます」

強の腕を掴み、立ち上がりながら男は藍に頭を下げる。そして、ふと、典の作った光に照らされ明らかになった藍の顔を凝視した。

「麗さん?! あんた、なんでこんなところに?!」

「?! おじさん、この顔の持ち主を知ってるんですか？」

「この顔の持ち主? あんた麗さんじゃないのか? そうだな。麗さんのわけないか。麗さんが呪術師のわけがない。しかもは紫曼シマンの町にいるはずだ」

「紫曼の町?!」

それってここからかなり遠いんですけど?!

「旅の方。私たちは麗を探しているんだ。麗の情報を教えてくれな  
いか。私は宮の呪術司で、麗の従兄弟だ」

美しき顔で邪気のない笑みを向けられ、男は呪術司だし、悪い人  
じゃなさそうだと、麗について知っていることを話し始めた。



空は狐のように笑うと凜にくちづける。

宮京の離れにある屋敷はみなに見捨てられたように静かだった。

「やっぱり帰ってこない」

月が真上に上がり、時刻は真夜中であった。

草は襖ソウを閉めると床に入る。

空と一緒にいる凜は別人のようだった。そしてこうやって夜は帰ってこないことが多かった。

「しょうがない。寝よう」

深く考えてもしょうがないと草はあくびをして目を閉じる。

母親を突然なくし、その死直前に自分の父親が帝であることを知った。

迷わず宮京に向かった。

警備兵は冷たく自分をあしらった。しつこく絡む草に苛立ち、刀を振り上げ、凜が止めに入った。止められなかったら自分は殺されていたかもしれない。

凜は命の恩人だ。

そして空は生きる道を授けてくれた。

母を、自分を捨てた帝を殺す。

草にとって、それが今自分が生きている証であり、目的だった。

「子供？」

「そうです。草っていうかわいい少年です。黒髪に緑色の瞳という変わった色彩の組み合わせでしたが……」  
男から麗レイの住んでいる場所を聞き出し、藍アイ達は男を森の外まで送り届けると紫曼しまんの町に向かった。  
思っていない情報に飛ぶのが苦手な強キョウも嫌な顔をせず、藍達と供に紫曼に向かった。

眠い…

朝から宮に引つ張り出され、緑森国りょくしんこく、碧雲国へきうんこくに飛び、紫曼の町まで足を伸ばすことになり、藍の体力は限界に達しようとしていた。  
しかし、ここで弱音を吐いたら、じゃあ、君はその姿でいいよねと師に嫌味を言われる可能性があり、藍は必死に師と供に強を支え、飛んでいた。

ぐらっ

「大丈夫か？」

紫曼の町に降り立ち、眩暈を覚えた藍はがしつと強に腕を掴まれた。

「あ、ありがとうございます」

やばい…

強様も自分も大変なときに…

自分の腕を掴み、側に立つ強を見上げると同じように青ざめた顔をしていた。

こちらは疲労というよりも、長く飛んだせいで、吐き気を催しているようだったが…

「強様、大丈夫ですか？」



















## 六

「草、まず私が邪魔入らないように結界を雁山に張る。その後帝を狙う」

師匠にそう言われ、緊張しながらも草はうなづく。

雁山についた草と凜はまず茶会が開かれる屋敷を確認した。小さな屋敷は外に開かれた茶室があり、帝を警備する東の呪術師・賢と数名の警備兵は外で待機していた。

空がお茶を立てる姿が見えた。

そして二人は行動を始めた。

雁山の四方に結界用の文字が書かれた石を置く。屋敷の上空に飛んだ凜が気を高めると結界は完成する。それから二人は賢達に近づいた。

お茶会は進み、帝と空が楽しげに話をする様子が見えた。

凜は失敗したときのことも考え、身元がばれないように頭巾をかぶる。草も師にならい、紫色の頭巾をかぶった。

「!？」

ふいに賢の側の警備兵がなぎ倒される。

「甘くないでほしいな!」

自分に放たれる気を賢が片手で払う。そして帝のいる茶室の中に飛んだ。

「何用だ?!」











































でも、宮に草くんが拘束されたらどうなるんだろう？  
処罰？でも帝の子供だよ。

「藍。行くよ」

考えごとをしている藍に典がそう声をかける。

「はい、行きっ！」

藍は慌てて部屋を出ようとして、着物の裾を踏む。バランスを崩したところを支えたのは強だった。

「あ、ありがとうございます」

「礼は必要ない。藍殿。帝はわきまえた方だ。大丈夫だ。安心しろ」  
警備隊長は支えた藍の体から手を離しながらそう言う。

「そうですね。はい」

ちかくにはいつも強様もいるし、間違いはないはず。  
問題は草くんか。

藍はぺこりと強に頭を下げると典の後を追った。

















つもりはなかった。























「……どうしようかなあ」

空は甥に背を向けたまま、笑う。

「空！」

「僕はそついう君が嫌いなんだ。草は残念ながら打ち首だ。またね」

「空！」

海の悲痛な叫びは叔父には届かなかった。

空は甥に再び顔を向けることなく、地下牢を足早に去る。悲痛な声で自分が呼ばれるのがわかったが、そんなものどうでもよかった。



















った。

「凜め……」

空はそうつぶやくと新しい杯に酒を注ぎ、一気に飲み干す。喉に痛みが走ったが、現帝はその痛みを無視して、飲み続けた。





















母を失った悲しみを忘れていた。  
いや、多分忘れていたつもりだった。

でもずっと心の中に悲しみは残っていた。  
美しい母、優しかった母。

ごめんなさい。

母さん、

母さんはきつとこんなことを望んでなかった。

少年は帝を、父を殺そうとしたことを悔やんだ。

森の中はしんと静まり返っていた。時折梟や野生の猿の声が遠くから聞こえてきた。草は声を押して殺して泣いていた。

少年は自分がしようとしていたことを後悔していた。







「おかえり。藍」

師の言葉に藍は思わず嬉しくなる。そして気がつく走り出し、その胸に飛び込んでいた。

「藍?!」

自分に抱きつく弟子に典はぎょっと体を強張らせる。しかし、その苦勞をいたわり、そっと抱き返した。





































と上空に舞い上がった。

「空！」

帝は空を呼び、宙を見上げる。風は男の姿になり、その体を抱くと空高く上がり消えた。





















